

国際協力事業団タンザニア事務所
事務所長／駐在員／調整員 殿

隊員番号 _____
隊員氏名 _____
派遣国 タンザニア _____
派遣隊次 14 年 1 次隊 _____
派遣職種 理数科教師 _____
出身県 _____
身分措置 有 ☒ 無

第 5 号報告書(赴任 24 ヶ月目)の報告書を別添の通り提出します。

- 1 「青年海外協力隊の海外協力活動に関する合意書」の項 3 (6)に基づき提出します。
- 2 本報告書を国内での協力隊関係者への閲覧のみならず、原則として一般公開及び複写についても了承します。
- 3 本報告書を非公開とする場合は、その理由を記述します。

非公開の理由

署名 _____

目次

- 1 隊員活動報告書
- 2 隊員業務報告書
- 3 隊員業務計画書
- 4 添付資料 ☒ 有・無

目次

(1) 協力活動終了	
a.活動計画の達成度	1
b.全期間の協力効果	2
c.後任隊員への要望	2
d.今後の協力の見直し	2

隊員活動報告書

1 第5号報告書(赴任24ヵ月目)として、以下の項目について報告します。

(1) 協力活動終了

a.活動計画の達成度

第1号報告書で掲げた最大の目標である生徒の意識改革、報告書のコメントにもあったがとても challenging な課題だったと思う。ほとんどの生徒は、基本的に N.E.(National Examination)をパスすることが目標であり、本当の意味で数学や理科が出来るようになることを望んでいる生徒はとても少なかった。そのような状況で、数学の楽しさ、理科の楽しさを伝えようともがいた2年間であった。しかし、科学することの楽しさを分ってもらうためには、本質的な理解が必要であり、彼らがこれまで行ってきた試験前に暗記して、試験が終わったら忘れる勉強とはまったく違い、この勉強法から離れられなかった生徒達にとっては厳しかったかもしれない。私が来るまでは、数学の試験も授業も暗記で間に合うようなものであったため、それまでは高得点できていた生徒達の中に私が来てからガタガタと成績が下がったものもいた。彼らにとっては、成績の下がる私の授業、試験はよくないものであり、妨害、逃避の対象であった。しかし、きちんと数学の勉強が出来ていた生徒、そして、私の話を聞いていた生徒達は、それまでと変わらず或いはそれまで以上の成績を取るようになったのも事実である。更に彼らは、初見の問題でも臆することなく挑戦し、正解できるようになったことは私にとってうれしい限りである。

本来、科学は未知のものを既知にしていくものであり、試験での正解を導くためのものではないのだが、幸か不幸か私達は偉大な先人達の築いてきた定理や原理の歴史や方法を学ぶことから始めなければならない。この国(タンザニア)に限ったことではないが、これらの事柄を学ぶ(覚える)ことが理科、科学の全てになってしまっているのが今日のタンザニアならセカンダリスクール、日本なら中学校、高等学校の理科の授業の現状ではないだろうか。正直な話、私は高校の時、数学、理科がつまらなくてしょうがなかった、そして勉強もしなかった。恥ずかしながら当時の私の成績表には黒のペンで成績が記入された教科は国語くらいである。つまらないのには理由があった、数学ならパターン化された解法を覚え、試験ではそのパターンの中から適合するものを選んで数字を変えていくと正解が出る。そこに、その問題が必要とされた背景や解法の理論的な証明はなかったように思う。勿論自分が受身で勉強しており、それ以上自分で探求しようとしなかったのが最大の問題であったことは間違いのないのだが。そんな私なので、勉強しない、成績が良くない生徒の気持ちが分かっているつもりでタンザニアの教壇に立ったのだが、彼らは私が理科をつまらなく感じ、出来なかった生徒であったときとはまったく逆であった。ある決まったパターンを明示されず、各問題に対応する公式を与えられない授業をつまらなく感じ、解法の選択に混乱するのである。

この課題に対して達成度を明記することはとても難しい。伝わった生徒には伝わっただろうし、伝わらなかった生徒には伝わらなかったということになってしまう。

実験実習は教科書記載のものを全て行うことは出来なかったが、それなりに出来たと思っている。特に From I の化学の授業では、私のつたない英語、スワヒリ語をカバーしてくれた。実際に現象を見せることが、言葉で話すよりも確実に現象を伝えることが出来ていた。化学は、実際に現象や、変化、物質そのものを見て実感すること以外に理解できない部分が多いので実験は大変有効であった。

b.全期間の協力効果

実験の授業については、タンザニア人教師の苦手とする分野であったので、自分が実験を授業に積極的に取り込んでいることが、彼らへの小さな刺激にはなっていたと考える。これまでの報告書の中にも記述したが、タンザニア人の教師も少しずつではあるが、授業中にデモンストレーションを行うようになってきたことは一つの効果であろう。

また、教師不足の補填をメインの目的として派遣されている私は、2年間教師として活動したということで十分効果があったと評価していいのであろう。

技術移転という点から評価するとおそらく私は何も効果を挙げていないのではないかと思う。同僚のタンザニア人教師は皆年上で教師経験豊富であり、私が口をはさむ必要もなかった。また、タンザニアにはタンザニアのやり方があり、日本から来た私たちがそれを変えるべきではないと思うし、変えることは不可能であると思う。

c.後任隊員への要望

前任の私がやったことをあまり気にせず、自分のやりたいように活動してもらうのが一番だと考える。したがって、要望はない。唯一つ挙げるとするならば、『生徒達をよろしく願います。』に尽きると思う。

d.今後の協力の見直し

私の在任中に校長が2度変わり、現在は3人目の校長が学校改革に励んでいる。私は、一月しかともに仕事をする事が出来なかったが、また新しい方針が出てくることと思う。したがってここで私は、なんともいえないのである。後任の方には申し訳ないが、赴任してその時に判断してもらうのが最も良いと思う。

正直に書くと、この国の教育が本当に良くなるためには、タンザニア人自身が苦心して変えていこうとしない限り良くならないと思う。したがって、現在のように他国の援助機関の人間が色々苦心している間はよくならないのではないかと思う。これも何度も書いていることだがタンザニアを変えられるのはタンザニア人でありタンザニア人でしかないのである。それも、政府の役人から発せられた変化ではなく、私達隊員が日常的に接する普通の国民レベルから上がってくる国民の意識の変化でなければ何も変わらないのだとこの2年間で確信した。援助によって見た目にはどんどん良くなっているように見えるかもしれないが、形式(ハ

ード面)ばかりが変わって、中身(ソフト面、国民の意識)はあまり変わっていないのである。他力本願でなんとなく適当、上手いかなかったらしかないかという空気がいつも流れている。これは、タンザニアの国民性でありこれが悪いとかという事ではないが、今ある先進国のように発展しようとするならばこのままではだめであろう。しかし、こんな適当でおおらかなタンザニアが私は大好きであり、今の日本のようには決してなあってほしくは無いというのが正直な意見である。

そして、タンザニアにはタンザニアに合った発展の仕方があると思う。私の勉強不足で具体的な例を示すことは出来ないが間違いなく今の先進国とは違う方向にタンザニア発展の道があると思っている。

協力の見直しということであるが私が強く言いたいのは、自分が育ってきた先進国の価値観を排除し、本当の意味でタンザニアを理解し、タンザニアのことを考えなければ今後の理想的な方向性は見えてこないのではないだろうか。具体例を挙げずにこんなことを書いている私はとても無責任だと思うが、この 2 年間でやっとここまで辿りついたという所である。このまま協力を続けるのは無意味であるとは言わないが、大きくこの国を良い方向へ変えていくこともないのではないのではないかと思う。

皆さんはご存知だろうか、タンザニアの初代大統領 Mwalim Nyerere は私が生まれる以前からこのようなことを考えていたのである。

『アルーシャ宣言 5.2.1967』

「我々まずしい国の人間は、今まで、豊かになろうと、『金をくれ！物をよこせ！』と営々と叫び続けてきた。しかしいっこうに豊かになったためしがない。それはなぜか？ 国の、人間の発展は金だ、物だと考えていたからだ。金が一物が一人間を創ると信じていたからだ。衣食足りて礼節を知るなどという格言は我々がもつべき言葉ではない。我々は知っている、我々自身こそが、人間こそが、国家を、発展を、金を、物を、そして人間自身をも作り出せる唯一の存在であることを。そしてそれは、石油もダイヤモンドも、ありとあらゆる資源を持たぬ我々が、力無き我々が、百パーセント賭けられる対象であり無限の財産である。

我々は確かに独立を勝ち取った。だがそれは自立ではない。我々は形のみ取り戻しはしたものの、その中身を再び奪われてしまったのだ。

聞け、兄弟たちよ。

自立とは自活ではない。

発展とは金ではない。

我々は食するために生きるにあらず、生きるために食し、我が子のために生きるなり。

豊かさとは人間なり。

独立とは人間の自立なり。」*1

JOLIUS K. NYERERE

本当に彼の宣言に私は同感である。しかし、現在 2004 年、彼の宣言から 40 年近く過ぎているが、本質的に彼が宣言を発表した当時と何も変わっていないのではないだろうか。なぜなら、国民の大多数は今でも、金をくれ、物をくれと言いつづけているからである。なぜだろう、一つの原因は先進国の援助であろう、金をあげ、物をあげているのだから、被援助国

はそれから離れられないだろう、もらえるものを断ってまで自立できるほど人間という生き物は強くは無いのでやはり援助に甘えてしまう。また先進国の援助も、形に残る成果をあげなければならないので、金や物を与えることに終始しているのではないだろうか。もっと人間を育てる、人間に賭けるような援助があっても良いのではないだろうか。どんなに先進国がお金や物をつぎ込んでも、人間が育たなければこの国は良くならない、私欲を排し、タンザニアの発展に情熱をつぎ込める人間が育たない限り絶対にタンザニアは今のまま、昔のままである、援助によって物は増え、見た目には発展しているように見えるかもしれないが・・・

最後に、2年間私はタンザニアのためには特別大きな貢献は出来なかったかもしれないが、私はこの2年間で貴重な経験が出来たと思っている。多額の税金を使ってタンザニアのために派遣されているのだから何か残さなければならないというのも一つの考え方であるが、私は途上国に派遣されて、その地の人々と共に力をあわせて何か出来ればそれで十分ではないかと今考えている。自分の活動を正当化するわけではないが、私たちは協力隊であり、援助隊ではないのであるから、何か形に残るものを残すよりも、心に残るものを残すのが私達の使命ではないだろうか。

以上

引用文献

*1 高野生(1991)：僕の学校はアフリカにあった，朝日新聞社，pp93-94.

添付資料

a. 隊員業務報告書.....	6
-----------------	---

隊員業務報告書

作成日：2004 年 6 月 20 日

第5号報告 派遣国：タンザニア 隊次：14 年 1 次隊 職種：理数科教師 氏名：

業務計画	計画していた業務内容等。
A 全て達成できた	1. 覚える事ではなく考える事を意識させる
<u>B ほぼ達成できた</u>	2. 間違いを沢山させる
C 半分達成できた	3. 未知の問題に対しても自分なりの答えを出せるようにする
D あまり達成できず	4. 実験・実習をできるかぎり行う
E 全然達成できず	5. 補習の開始
F その他	6. 自分の英語力の向上
	7
	8
自己評価：B	9
業務内容	実際に活動した業務内容等。
	1 毎日の授業
	2 補習
	3 英語の学習
	4 日本語の時間
	5 実験を見せながら行なう授業
	6
	7
	8
	9
活動成果	現在進めている業務の進捗状況や成果等。
A 大変成果がでた	1 補習を開始した。
B 良い成果がでた	2 日本語の時間
C ある程度成果がでた	3
<u>D 余り成果がでず</u>	4
E 全然成果がでず	5
F その他	6
	7
	8
自己評価：D	9
特記事項	業務上で直面している課題や問題点等
	1 From I 化学担当となり、また実験の授業を再開している。
	2 デイスクールなので、放課後の活動が出来ない。
	3
	4